

環境という思想

渡 辺 隆 一

信州大学教育学部志賀自然教育研究施設

Environment as the Thought

Ryuichi WATANABE

Faculty of Education, Shinshu University

Key words: 環境教育, ボランティア, 社会システム

哲学や思想書がブームだという。多くの問題をかかえ、先行き不透明な現代にあって自分自身やその立場、越し方、ゆく末に深い思いを巡らす機会や人が増えたということであろう。一方で世界での環境問題の解決の歩みは一層の拡大と混迷を深めており、時代の不透明感をますます高めている。その根本的な解決のためには文明全体の転換が必要なことは25年も前の国連人間環境会議やローマクラブの将来予測からも強く提唱されてきているのである。しかし、世の中は急には変わらなかったし、今、急にも変わりそうにはない。戦後の世界を支配した〔経済成長とそれによる豊かな生活〕の神話が、先進国ではすでにかけりが出てきているが依然世界の多くの国々の目標となっているからである。明らかに、世界規模での文明の転換をはかるには新しい価値観、世界観、考え方、意識、思想が求められている。これまでも歴史上多くの世界的な思想、価値観が広まり、実践され、批判され今の世が生まれしてきた。フランス革命の標語〔自由、平等、博愛〕もその後の歴史に大きな流れを生み出し、〔反核、平和〕も戦後の広島、現代のボスニアが強く世界に訴える思想となっている。そして今、〔環境〕はそれらに並ぶ新たな思想として世界の人々に多くの事を訴え、人々の考え方や意識、価値観の重要な基礎を提供しようとしている。一つの思想として〔環境〕は今後、大きな比重を占めるであろうし、多くの議論を呼び、また広まってゆくであろう。思想としての環境について考えてみたい。

現在の文化や科学、社会といったものは多くの人にとってはすでに生まれながらにしてあるものである。

自然や環境との長い交渉の中で培われてきた農耕文化であれ、最近の若者文化であれ、生まれながらにしてその中で育ち、それを吸収して現在の私たちがある。もちろん生活や選挙、住民活動をとおして私たちは社会参加もしてはいるのだが、現在の社会のあり方にとれほどの責任を自分たちのものとして感じているだろうか。そして問題はこれからの社会なのである。解決すべき多くの環境問題をかかえ、新しい社会や文明が必要だと言われている現在、どうしたらそれは可能なのだろうか。一方でそうした現実の社会に対して、未来とか希望、自由、平等、人権、平和などの概念はよく言われるように今だ実現していない夢のようなものである。戦争の無い状態が平和なのではなく、平和を求める世界の人々の心が重要なのだと言われる。こうした概念は個人の心の問題であり、個人の価値観や思想、そして具体的な意志によって強く形成されるものである。実際に将来の社会の在り様を決めるのはもちろん現実の政治や行政、産業などの力関係なのであるが、その背後にある多くの人々の希望や夢もまた様々な回路をとうして将来の社会の在り様になんらかの影響を及ぼすはずである。その夢や希望が強ければそれだけ影響力も大きくなるはずである。この構造を単純に言えば、現実と将来の社会の在り様をつなぎ、しかも個人的に関与しうることと言えばそれは個人の〔意志〕だけであり、それを裏づけるものが〔思想〕なのである。そして、この個人の新たな夢や希望を生みだしうる現代の思想として〔環境〕は十分な素材を提供しうるかが問われることになる。

今や環境は、地球温暖化、オゾン層破壊、酸性雨な

どで全ての地球人に直接関係し、また強く影響もしている。この点で環境は全ての人にあまり関係し、関与することが可能であり、またその問題解決のために新たな価値観に基づく社会や文明が求められている点でも普遍的な思想となる資格がありそうである。しかし、現実には環境は必ずしも全ての人に強く意識されているわけではない。また、地域的な問題にあっては実際に環境悪化の被害を受けていてさえも、因果関係の複雑さや隠ぺいによって当事者が事態を環境問題としての確に認識することができない事や、わかっている外部からの強圧や差別によって声をあげ、批判の行動に結び付けることができないことさえこの世界では未だに多いのである。それは反面では、そうした環境難民、人権抑圧、核実験、内戦などの現場に不運にも立たされた人達の現実を私たちの多くが知ることができず、そして支援の手だてをほとんど持たないことの不幸でもある。私たちの多くは環境問題のただ中に置かれていてさえその現実を知ることがなく、またその解決への社会的手段をも持たないと言う二重の不透明さの中に置かれていたとも言える。この二重性を打ち破るためにも「問題」の事実を知り、解決のための未来を「意志」するために、環境を「思想」として強く意識する必要がある。

この活動が環境教育と言えらるだろう。しかし、言葉どおりであれば環境教育はまさに思想教育になってしまふ。誰かによる上からの教育ではなく、多様な価値観に基づいた個々人の自主的な環境意識が必要なのである。それでも過去には、一見理想的に見える多くの思想がファシズムの手段として利用されてきた。日本軍国主義、ドイツのナチズム、カンボジアのポルポトなど、一時とはいえその思想を望んだ多くの人が在ったことも事実である。多くの人の賛成する思想、意志、価値観だけで健全な社会ができるわけではないの

である。環境問題における解決の手段としての規制措置が環境ファシズムに置き変わりかねないという危険が環境教育には付きまとうという指摘がされる由縁である。しかし、環境が、これまでの概念や思想と大きく異なる点は、環境には実際のところ「現在多々ある環境問題を早急に解決すべし」という以上の明確な目標は無いということである。当面する多くの環境問題は必ず環境か経済かのような相反する価値観に直面させられている。環境教育は、実際の地球的あるいは地域的な環境問題に具体的に対応する中から個々の問題点とその解決策を試行錯誤し、そのありうべき姿を模索しなければならないのである。誰にでも飛びつけ、簡単に説明される理想的な環境観などあるわけではなく、現実の問題に取り組む個々人の参加と体験の中からしか環境という思想の核心は生まれえないということである。その点で環境教育は個別的であり、細分的であり、ファシズムの集団的狂気とはかけ離れたものである。もちろん多くの官民の研究機関が世界的な分析と対策を提案し、国際的な集約化さえ図ってはいる。しかし、それは冷静に見れば単なる過去の事実の指摘であり、今後の可能性の模索であり、終局の姿は結局の所個々人が個々の地域で選択しなければならないものである。ここでも問われるのは環境についての個々人の意志であり、ありうべき将来の社会の在り様なのであり、その依りどころとなる思想なのである。ここでの環境という思想、それは世界の多くの人々に共通に理解され、支持される物であって欲しい。強制的にはなく、身近な問題から自主的に考え、各自なりの判断に基づき、参加でき、行動の中から各自なりの価値観を育ててくれるものであって欲しい。そのとき環境はもはや単なる技術や科学としてではなく、思想としてもより幅広い視点から議論されるものになるだろう。(1996. 1.20)

(受付 1996年1月29日)